

平成19年度第1回通常総会

新会長に宮下秀樹氏を選任

平成19年度第1回通常総会が5月19日午後2時から東京・麹町の弘済会館で開かれた。会員164人が出席し、①平成18年度事業報告及び収支決算・財産目録の承認、②平成19・20年度役員及び評議員の選任、③平成19年度除籍予定者、④創立100周年記念事業特別会計中間報告について審議された結果、いずれも原案どおり可決承認された。新しい会長には、宮下秀樹氏を選任した。

■会長あいさつ

「100周年」終え感無量
議案審議に先立ち、任期を終え

た平山善吉会長は、あられました次のように挨拶した。

100周年記念事業を無事終えることができた。「日本山岳百年史」の刊行をはじめ、英文ジャーナル、「新日本山岳誌」などの刊行。これらの集大成としての式典は皇太子殿下のご臨席のもと、世界各国から代表者を招いて開催した。とどこおりなく終了し感無量である。

この4年間、いくつかの改革を実施した。支部を重視し、学生部登山を奨励、会員サービスを図り、公益法人への道を開いてきた。しかし、会員の減少が続いている。

かつて毎年100〜200人の会員増があり、2001年には6007人となった。これをピークに減少し続けている。会の収入も減少していく。これからは既存の事業をただ続けるのではなく、方向転換していかなければならない、と思う。

考えなければならぬ問題を提起したい。タブー視されてきたことだが、あえて申し上げたい。第一は会員数の問題だ。これまで会員を増やすために、ほとんど無制限に入会させてきた。それでいいのだろうか。会員にはおのずから一定以上の山の知識と経験が問われ、諸先輩から受け継いできた品格が必要ではないか。適正な規格を決めることが必要ではないだろうか。第二は委員会だ。すべてが

必要だろうか。私は委員会の統廃合を提案してきた。総務、財務委員会とか山岳、会報、図書、資料、映像委員会などは必要だろうか、きびしい財政状況のなかで、必要でないものもあるように思う。同好会でもいいのではないか。支部や同好会の活動を見習うべきだ。第三は、登山を「業」としている会員の取り扱いだ。会の門戸を閉ざすものではないが、会の中核にあらる人が商業登山をするのは反対である。いずれも私案として批判をいただき、新しい会長のもとで、議論していただければ幸いだ。

■事業報告・収支決算 首都圏に3つの支部誕生

この日の総会には2518の委



4年の任期を終え、あいさつする平山善吉会長

任状が提出された。在籍者は5543人であり、出席者を合わせると、会員の3分の1を上回って総会は成立。

文部科学省の指導で事業計画・予算案を当該年度がスタートする前に決定することとし、昨年からの通常総会を年2回開いている。このしらの事業計画・予算案は3月に総会を開き承認した。今回は昨年度の事業報告・収支決算を審議する。吉永英明総務担当理事が事業報告を、賛田統亜財務担当理事が収支決算・財産目録を説明した。

【事業報告】 公益社団法人への移行に備え、「公益的事業」と「一般事業・会員のための事業」に大別した。支部の公益的事業が多い。

4月には宮崎支部が子ども登山教室、5月には北九州支部が初心者登山教室、8月には北海道支部が自然児学校、また青森支部が身障者登山を開催・実施した。

9月24・26日、日本・ネパール国交樹立50周年ネパール展をマナスル委員会と共催で実施した。自然保護・山岳環境保全事業では、高尾の森づくりのほか、青森支部が白神山地再生育林、東海支部が猿投の森づくり、宮崎支部が水原の森づくりを実施、関西支部が中央分水嶺踏査事業に入らなかった四国分水嶺を踏査した。

このほか「日本山岳会百年史」を刊行、第9回秩父宮記念山岳賞を山本紀夫氏に授与、海外登山基金による海外登山の助成をクビツアンポ源流学術登山隊など3隊に行なった。

会員のための事業としては、12月に年次晩餐会を、はじめて東京を離れ東海支部の主管で、名古屋で開催、またマナスル登頂50周年を記念し、ネパールで記念レセプションを開き、トレッキングを実施した。

首都圏での支部化を進めた結果、ことし5・6月に栃木、茨城、千

葉で設立総会を開く段取りとなった。全国28支部となる。

【収支決算等】 収支決算は、収入合計が7271万円だった。うち会費・入会金は6525万円、収入全体の89・7割を占めた。新入会員は150人を予定したが、141人とどまった。

支出は7194万円となった。内訳は事業費が4108万円、管理費は2913万円。事業費が多くなるよう心がけている。事業費のうち、出版費は「山岳」製作費のページ減などによって予算を下回った。支部関係費は上高地で支部長会議を開催し増加。その他事業費は総会・晩餐会などの費用、ウェストン祭・自然保護全国集会などに対する補助金、グッズ用品の仕入れなど。仕入れを控えたことなどで予算を下回った。

当期収入から支出を差し引いた当期収支差額は77万円となった。これは当期収入で支出をまかなったことを示している。前期からの繰越金を加え、次期繰越収支差額は925万円となった。期末正味財産合計額は4億2775万円。

これらに対し竹中彰監事から収支計算書等が正確かつ妥当であり、

さらに理事の業務執行が誠実にこなされたことを認める監査報告があった。

■理事・監事、評議員の改選 執行部案どおり拍手で承認

第2号議案は「役員・評議員の改選」。平山議長が候補者を提示した。前々回の改選では、質疑・意見が相次いだ。今回は大きな反対表明もなく、多数の拍手でもって執行部案通り承認した。

平成19・20年度理事・監事

会長	宮下秀樹	新任
副会長	神崎忠男	新任
副会長	鯉坂青青	新任
理事	斎藤健一	再任
理事	吉永英明	再任
理事	藤井正善	再任
理事	石橋正美	再任
理事	古野 淳	再任
理事	太田晃介	新任
理事	宮崎絃一	新任
理事	成川隆顕	新任
理事	堀井昌子	新任
理事	相馬 勉	新任
理事	山川陽一	新任
理事	岡部 紘	新任
理事	深川安明	新任

監事 竹中 彰 新任

評議員

▽再任 日下田實、岩坪五郎、河野長、田部井淳子、今村千秋、藤本慶光

▽新任 秦野一彦、阿部和行、酒井省二、中野和郎、高遠宏、新妻徹、浜口欣一、山本聖二、坂口三郎、近藤緑、寺西申生、小疇尚

■19年度除籍予定者
首都圏30人、支部61人

平成19年度の除籍対象者は91人。会費を17・18年度の2年間滞納している人である。19年度も納入しないと除籍となる。首都圏30人、支部61人。会員番号100000台の会員が多い。実際の除籍者は例年、40〜50人となるが、1年間でほしいから会費を納めて留まってもほしいという要請があった。

■100周年記念事業 特別会計
募金・寄付総額7184万円

100周年記念事業特別会計について中間報告があった。事業費総額1億517万円。最終的には60〜70万円が残る見込みだ。

募金は、会員から3年間3000円ずつ募金していただくことを主体に行なった。会員、企業などから計667

募金内訳	総数(件)	募金(万円)
会員	3,429	7,002
有志	345	999
企業	104	2,546
学大	27	342
その他	18	83

補助980万円など。

■質疑・応答

柴田篤志会員(4932)「山岳」復刻版の刊行に対するアテネ書房からの手数料28万9800円が同社の倒産で未回収になっているのではないか。

吉永理事 昨年8月、法的整理に入ったと通知を受けた。未回収となっている。回収は難しい。

山川陽一自然保護委員会委員(12946) 自然保護活動は支部が活発だ、という報告があったが、自然保護委員会は支部に委員を多く持っている。昨年、山陰で

開催した自然保護全国集会も本部と支部が一体となって実施したものだ。認識を改めてほしい。

大島輝夫会員(4012)「百年史」編纂の労をねぎらいたい。収集された史料は、ぜひ保存してほしい。戦時中の記述には異論もあるが、会が派遣した登山隊を表の形にして掲載してほしかった。

松田雄一百年史刊行委員長(4111) 積み残したものは「山岳」で掲載したいと考えている。新妻徹会員(5868) 北海道

で台風による被害地の植林をやっている。100周年記念事業のなかにある「森づくり補助」は、どのような内容か。参考にした。



会員164人が出席、満員になった総会会場

山川会員 高尾の森づくりでの記念事業で、わくわくピレッジで行なった演劇に対する費用だ。実際は企業から集めたお金で行なった。関連記念行事といったものだ。

■新会長挨拶
縮小均衡をも視野に入れる

議事終了のあと新役員・評議員が紹介された。会場の前にずらりと並び、それぞれに挨拶。大きな拍手を受けた。宮下新会長は「会員の純減、ひいては収入減少が目前に迫っている。公益法人化、首都圏の支部化といった問題もある。縮小均衡も視野に入れて行動していかねばならないと考えている。60歳代が元気だという。日本山岳会も60歳代の会員が全体の38割を占めている。ぜひ知恵とパワーをお借りしたい。若い人の魅力あることもやっていきたい。とにかく「楽しい会にしよう」を合言葉にして頑張っていきたい」などと語った。

総会終了後、懇親会を開いた。山田二郎名誉会員が音頭をとって乾杯し和やかな歓談を続けた。(文・高橋重之、写真・神長幹雄)